

「専門職間連携の擬態化」を回避するためにグループワークを学ぶ意義について

○ 島根大学 黒田 文 (002095)

キーワード：専門職間連携の擬態化、グループワーク、相談援助演習、

## 1. 研究目的

本研究の目的は、専門職間連携の擬態化（実方 2014）を回避するための教育的取り組みとして、グループワークを学ぶ意義について検討することである。ソーシャルワーカーが他職種の専門家と連携して支援にあたる専門職間連携は、実践のキーワードとして定着している。その一方、子ども虐待の対応において専門職間連携を行う実践者を対象に実施された調査では、クライアントを理解しようとする力動（＝対象への焦点化）がなくても、専門職間が連携しているという認知（＝専門職間連携の擬態化）が働く危険性が示唆され、この擬態化に影響を与えるのは、支援者個人の利害、専門職間の対立や葛藤などの摩擦を避けたいという支援者側の欲求、組織の意志などであると推察されている（実方 2014）。連携の定義には諸説あるが、連絡をとりあって1つの目的のために複数の人が一緒に物事を協力的に行う行為として実現された状態を連携と定義するならば（山中 2003, 栄 2010）、複数の専門職が関わり目的を遂行する連携システムには、グループシステムの要素が内包すると考えられる。

連携を擬態化させないためには、対象への焦点化を意図的に強調する実践展開が必要だと考えられるが（実方 2015）、同時に、対象への焦点化を強調するがゆえに発生する支援者間の対立や葛藤にも対処する必要があるだろう。なぜなら、対象への焦点化を強調し、支援者集団の連携を実体化していくプロセスでは、専門職間の信念対立が浮上することは往々にして起こりうるからである。尾崎（1997）や岡（1999）によれば、日本では義務教育における集団体験や日本文化に根ざした情緒的一体感が集団の原体験となり、グループ内の対立を極力避けようとする同調行動や妥協行動が顕著に働くと指摘される。このような規範をもとに構築される関係であれば、複数の専門職が連携システムに関与する過程で、対立を回避したいがゆえに連携の擬態化を余儀なくする行為が優位になりうるのではないだろうか。つまり、他の支援者との対立や葛藤を極力避けようとする支援者の認知的側面が連携の擬態化に影響する一つの要因と捉えられるならば、支援者には自らの認知を理解し調整する機会が必要だと考えられる。そのような問題意識に立ち、本研究では社会福祉士を目指す4年制大学の4回生（2015年度受講生11名）を対象に相談援助演習のグループワークを通じて、1) グループで物事を遂行・決定することについて、元々、どのような認識を抱いていたか（先行的認知）、2) 演習でグループワークを経験した後、その認識は変わったか／どのように変わったか（認知の調整）について言語化してもらい、グループに対する彼らの認知の調整内容について検討する。

2. 研究の視点および方法

連携の擬態化が起こる一つの要因にグループに対する原体験があると捉え、本研究では、グループについて学生がもともと抱いているメンタルモデルとしての先行的認知の内容について探り、演習を通じてそれが調整されるか／どう調整をされるかについて探索する。分析対象は学生が記述したレポート内容であり、テキスト全文を文字データとして、自然言語処理ソフト（IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0）を用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究者の所属学部には、研究倫理審査を行う組織が設置されていないため、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して調査の実施と解析を行っている。調査対象者の匿名性・プライバシーを保持することに加え、回答者からはデータ解析の結果を研究成果として公表することについて承諾を得た。データについては必要に応じて開示できるよう管理・保存している。

4. 研究結果

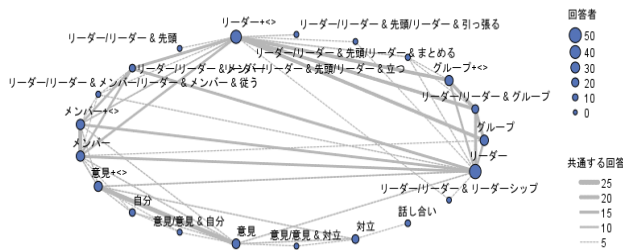


図1 先行的認知

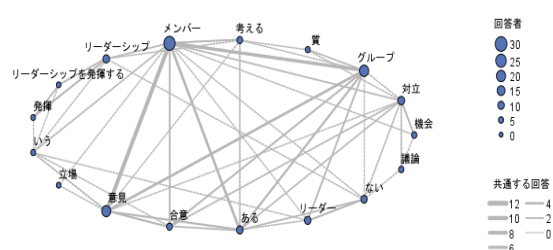


図2 調整された認知

5. 考察

図1と図2における言葉ネットワークの比較からは、グループを捉える学生の認知に変化が生じていると推測される。特に、グループにおけるリーダーの役割、リーダーシップの形態、メンバーのあり方、対立に関する説明の内容に変化がみられる。演習後には、グループ（メンバー）に対する信頼が必要であること、リーダーシップはリーダーだけが発揮するものではないこと、対立を避けて歩調をあわせるのがよいと考えていたが意見の多様性を確保するという観点からは必ずしも対立が悪いことではない、と捉え直す調整が行われている。認知が調整されたことで、実践が現実的にどれほど修正されたかという点については検証されていないが、先行するメンタルモデルが人間の行動へ影響を及ぼすことを考慮すれば、演習を通じて対立というグループ・ダイナミクスへの認知を見直し、新たな行動へむけた萌芽を育てる教育機会を提供することは重要だと考えられる。

【引用・参考文献（抜粋）】

実方由佳 (2014) 「子ども虐待対応における『専門職間連携』の擬態化」『社会福祉学』55(2), 27-39.  
 実方由佳 (2015) 「子ども虐待対応における『専門職間連携』に関する地域間での“違い”」『社会福祉学』55(4), 30-42.